

アンコール企画展

高井有一展

展示室の一部を改装し、旧蔵書で書齋を再現。
新しく寄贈された原稿、書籍、雑誌等を展示します。



写真提供：中村輝子氏

2018 7/14(土)～11/4(日)
新潮社記念文学館

開館時間 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)

休館日 月曜日(祝日は開館)

観覧料 大人(高校生以上)300円 小中学生150円

※ 団体割引あり、仙北市民無料

〒014-0311 秋田県仙北市角館町田町上丁23

電話 0187-43-3333 (仙北市学習資料館共通)

主催 仙北市・仙北市教育委員会

協力 中村輝子氏



▲執筆に使用されたペン

アンコール企画展 高井有一展

皆様の声により二〇一七年度企画展の内容を一部変更し、アンコール展示を行います。

この展覧会では、二〇一七年にご遺族から寄贈された高井有一氏旧蔵資料から約一〇〇点を展示します。資料は書籍を中心に、原稿、雑誌、愛用品など多岐にわたります。祖父田口掬汀の故郷であり、自身も戦時中疎開した角館町(現仙北市)との深い交流が、今回の寄贈につながりました。

展示室内に新たに設けられたスペースでは、旧蔵書を展示し、愛用品とともに

「高井有一 書齋」を再現しています。

※展示資料は変更になる場合があります。

「手放せない本」

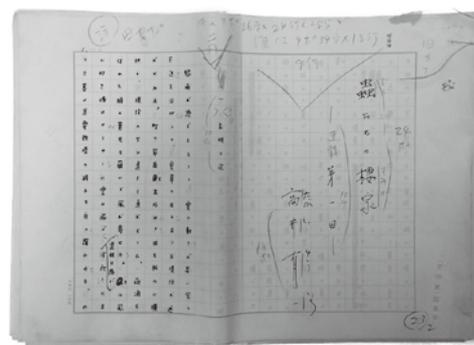
あの大地震の日からもう三十日近い日が過ぎたが、私はまだその日に受けた僅かばかりの被害の痕跡を消しかねてゐる。地震の日是一家で葉山で過ごしてゐて、これが大災害になるといふ予感はまだでなかつた。翌る日、一と足早く東京へ戻つた家人が、私の仕事場にある本が床に落ちて散乱してゐるのを発見した。あなたが家にゐたら重たい本に叩かれてきつと死んでゐたに違ひない、と家人は言つたが、私にはそんな実感はまるでなく、この機会に少し本を整理して売らうか、などと考へただけであつた。

それなのに、私は未だに本の整理に手をつけられないでゐる。長年一緒に暮らして来た本が、僅かの金と引き替へに失くなるのが厭なのかも知れない。(中略)

雑然と積み上げた本のなかから、茨木のり子作品集「言の葉」が出てきた。私が日ごろ親しむ「根府川の海」が載つてゐる。(中略)

かうした詩を読むとき、私の眼の前には、何度も車窓から見た根府川の海と空が広がる。根府川にも曇の日があり、土砂降りの雨だつて降るだらうに、私の眼に映る根府川の空は、いつも奥深く蒼い。そしてその空には、作者茨木のり子の激しい感情が張り詰めてゐる。茨木のり子は、晩年になつてからも、その時々感慨をこめてあの空を眺めたのだらうか。そんなことを考へると、ますます手許の本は離せなくなる。

高井有一『時のながめ』(新潮社 2015.10) より転載



▲原稿「蟲たちの棲家」



▲文鎮、筆皿、ペン

資料はすべて高井氏旧蔵品



写真提供：中村輝子氏

高井有一 たかい・ゆういち

1932.4.27-2016.10.26

東京生れ。成蹊高等学校で中村草田男の授業を受け、成蹊大学に進学。1952年、早稲田大学第二文学部英文科に編入し、1955年卒業。共同通信社文化部記者の傍ら、1964年同人雑誌「犀」の創刊に参加し、同人の立原正秋、加賀乙彦、後藤明生らの知遇を得る。1965年『北の河』で芥川賞受賞。『立原正秋』(毎日芸術賞)、『高らかな挽歌』(大佛次郎賞)、『時の潮』(野間文芸賞)ほか著書多数。日本芸術院会員、日本文芸家協会理事長、日本近代文学館理事長も務めた。『時のながめ』(2015.10 新潮社)が最後の著作となった。